

人生のサウンドトラックを奏でていきたい

ゲスト◎コンポーザー・ピアニスト

天平氏

子どもが持つ「とげとげの個性」が大切

—ピアニストとしては異色の経歴ですね。
神戸出身で、子どものころは裏手の山をいつも駆け回っていました。協調性が全くなくて、人と同じことができない。学校では問題児扱いでしたね。人を型にはめようとする学校が嫌いで、高校は半年で中退。もともと身体を動かすのが好きだったので、まずは肉体労働に就こうと解体屋に就職しました。16歳になると大阪で一人暮らしを始め、朝から夜までクタクタになるまで仕事。それでも終われば日当を握りしめて、先輩たちと朝までカラオケ。そんな生活を送っていました。

—ピアノは幼いころから弾いていたのですか？

兄と姉が習っていたので、僕も5歳から始めました。でも、それはあくまで剣道、水泳、サッカーなどほかにもやっていた習い事の一つとして。遊び感覚でした。

ピアノの稽古は小学校でやめました。レッスンを強制されていたら絶対に嫌いな



プロフィール 本名・中村天平。1980年生まれ、神戸市出身。コンポーザー・ピアニスト（作曲家兼ピアニスト）。大阪芸術大学卒。5才でピアノを始めるが、中学からは完全に離れる。高校中退後、肉体労働のアルバイトで生活する。その後、ピアノを再開。音楽専門学校に進み、大阪芸術大学演奏学科ピアノコースを首席で卒業。2008年EMI ミュージックジャパンより「TEMPEIZM」でデビュー。2009年セカンドアルバム「翼」をリリース。独特の感性が生み出す、エネルギーで叙情性あふれる演奏は高い評価を得ている。現在東京とニューヨークを拠点に活動中。

なっていたと思います。後でピアノを再開しようとは思わなかっただろうし、音楽の英才教育を受けていたら、逆に今の自分になかったと思いますね。
いま振り返ると、僕は「大人になりたくない」と考えている子どもでした。大人になると、子どもが感じている素晴らしいものが感じられなくなる。自然と一体になる

力というか……。その感覚は絶対に失いたくないと思っていましたね。

子どもにはみんな「とげとげの個性がある」と僕は思っているんです。それは一人一人違う。でも、そのとげとげを刈り揃えて同じ形にしてしまおうとするのが今の教育。とげとげの個性を伸ばした先に、実は大きな才能が開く場合だってあるのに。



高校をやめて解体屋として働いていたころ



2008年、サントリーホールでのコンサートにて

期待してくれる人の一言が 自分を大きく変えた

——音楽を再び志したきっかけを教えてください。

解体屋の生活は楽しかったんですが、ふと、これが10年、20年先も続くのかと考えると、ちよつと違うと感じたんですね。人生を変えようと思いました。改めて自分と向き合い、僕が人よりほんの少しできることといえは、ピアノ。それで音楽専門学校に入学することになりました。

でも最初はサボり気味でした(笑)。それが、ある先生から「天平、おまえはやればできるのなんでやらへんねん。オレはすごく期待してんねん」と言われたんです。このたったひとりで意識がガラッと変わりましたね。音楽に対して真剣になった。そして、自信もつてきました。ピアノという夢を持って、新しい世界が見えてきたのだと思います。

——ピアニストになろうと決めたのはいつですか？

大学時代、最初はバンド系の音楽を目指していたんですが、手当たり次第にいろんなCDを聴いていくうちに、ジョルジュ・シフラというピアニストと出会ったんですね。その圧倒的な表現力、ジャンルの壁さえ壊してしまうエネルギー……あの衝撃は忘れられません。

彼はフランス国籍を取得したハンガリー人で、戦時下のハンガリーから何度も亡命を試みて、投獄されながらもフランスに渡ったピアニスト。投獄時の無理な労働によって手を壊してしまったり、息子さんを火事で亡くされたり、さまざまな人生の喜怒哀

楽を経験したことによって彼の音楽は成り立っていると思いました。彼の人生にとっても共感できたし、シフラのようにパッションで他人を感動させられるピアニストになりたい、と思ったのが大きなきっかけです。

人に勇氣やエネルギーを 与えられる演奏を目指して

——僕は自分を「コンポーザーピアニスト」だと思っています。

コンポーザーピアニストとは「作曲もするピアニスト」ではなく、「ピアニストだからこそ作れるピアノ曲を作る作曲家」と考えています。

いまはクラシックにおいては作曲家と演奏家は別々なのが普通ですが、昔は優れた作曲家は優れたピアニストでもあった。ショパンやリストやラフマニノフがそうだったし、僕がピアニストを志すきっかけとなったシフラも作曲や編曲をします。指の動き、フレーズ、和音の動き……彼らはどんな曲であればピアノという楽器が最高の魅力を発揮できるかを知っている。だからこそ優れたピアノ曲を書けるわけです。

僕はそれが作曲家、ピアニストであることの原点だと思うし、そこに帰帰して作曲・演奏活動をしていきたいと思っています。

——どんな瞬間に曲は生まれるのですか？

美しい景色にインスピレーションを受けたり、誰かとの出会いや別れの感情、過去の思い出から生まれたり、さまざまですね。僕は自分が作る曲は全部、人生のサウンドトラックだと思っています。僕の人生という物語の、印象的なある1シーンに流れる曲。映画音楽を聴くとその場面を思い出

すように、僕も自分の曲を弾くことでそのときの感覚や情景が蘇ります。

昔から僕は死ぬことが怖くてたまらない子どもでした。実はそれは今も変わりません。

でも、その恐怖は消せないけれど、もし50年後、100年後に、僕の曲を誰かが聴いてくれたり、ピアニストが弾いてくれたりするならば、彼らの中で僕は生き続けることができる、と思うようになりました。ずっと聴き継がれ、弾き継がれていくような曲を作っていきたいですね。

——最後にこれらの抱負を聞かせてください。

僕の演奏が、人に勇氣やエネルギーを与えられたら最高だと思っています。

できれば孤児院でコンサートをしてみたい。彼らは普通の子どもたちに比べたら、想像できないくらい厳しい環境を生き延びて、夢や希望を持つことにおいて難しい問題を背負っている子どもたちも多い。でも、問題児だった僕がピアノと出会ったことのように、ちよつとしたきっかけで人生は変えることができる。僕が音楽を届けることが、そんな彼らに夢や勇氣を与えるきっかけになれるなら、すごくうれしいですね。

それと、やつぱり世界で成功するアーティストになりたい。幸い、ピアノ曲には歌詞がありません。言葉の壁がないから、素晴らしい曲であれば、それは世界中で受け入れてもらえる。実は、来月から3カ月間、電子ピアノを担いでヨーロッパに音楽修行の旅に出かけます。イギリスやドイツなど10カ国をまわり、コンサート、イベント、ストリートなど色々な所で演奏するつもりです。たくさんさんのことを感じるだろうし、そうした人生のさまざまな経験を、これからの曲作りにも生かしていきたいと思っています。